

「歴史を生かしたまちづくりセミナー」開催

平成24年12月8日、「日吉の近代建築」をテーマに、第34回歴史を生かしたまちづくりセミナーが開催された。(主催：慶應義塾大学アート・センター、横浜市) 吉田鋼市氏(横浜国立大学大学院教授)からは、慶應義塾大学日吉キャンパス開設の歴史や、キャンパス内に現存する近代建築の価値について講演が行われた。ついで23年度実施された日吉寄宿舍南寮の保全工事の設計を担当した

(株)三菱地所設計 細見聡氏・森下昌司氏による工事報告では、創建時の外壁タイルやサッシ等の意匠をできる限り踏襲するためにどのように検証を重ねたか紹介された。また、フォーラムでは、都倉武之氏(慶應義塾福澤研究センター准教授)により、慶應義塾の学生の気風や寄宿舍での生活ぶりが語られた後、渡部葉子氏(慶應義塾大学アート・センター教授)の進行により、前述の4名

によって、再び寄宿舍として蘇った日吉寄宿舍の保全工事の成果、近代建築の保全と活用の意義について、意見が交わされた。当日は、寄宿生による解説付の日吉寄宿舍特別公開(主催：慶應義塾大学)や、『ヘリテイジDAY in 港北!』と題し、セミナーと併せて、港北区内の歴史的建造物を公開する「港北OPEN!HERITAGE」(主催：港北区)が開催され、様々な形で歴史的建造物に親しむことのできる一日となった。



フォーラムの様子



日吉寄宿舍特別公開の様子

「Open! HERITAGE in 旧保土ヶ谷宿

「Open!HERITAGE」は、普段見ることのできない歴史的建造物を見る貴重な機会として、横浜歴史資産調査会との共催により、今回で4回目を迎えるイベントで、旧保土ヶ谷宿を会場に、都心部以外では初めての開催となった。



大仙寺での解説の様子 撮影：米山淳一

旧保土ヶ谷宿は、旧東海道宿場として日本橋から数えて4番目。約2kmにわたる宿内がL字型に曲がる

全国でも珍しい宿場で、沿道には日本陣屋や旅籠の面影を伝える歴史的建造物などが残り、宿場として栄えていた往時を偲ばせている。

えながら、旧本陣である軽部家や旅籠を営んでいた金子家、創建が元禄時代と伝えられる大仙寺の本堂や山門などを見学。普段見ることのできない歴史的資産などから、地域の歴史を身近なものとして感じる機会となっていた。

当日は、約240名の市民が参加し、横浜国立大学大野敏准教授のミニ解説を交



金子家での解説の様子



軽部家での解説の様子

横浜ゆかりの彫刻が生み出されたアトリエ ～「井上信道の彫刻とアトリエ」展～

井上信道氏は、昭和50[1975]年に横浜文化賞を受賞し、平成20年に99歳で亡くなった彫刻家で、その作品は、横浜駅西口コンコースや公園などで市民に親しまれている。アトリエは、神奈川区にある昭和初期の建物で、戦前から彫刻制作を行い続けた場として、現在も作品とともに残されている。

展示され、彫刻によって西洋館のいつもと違う表情を見ることもできた。

また、神奈川大学内田研究室による井上邸などの調査研究の内容がパネル展示されたほか、最終日には、学生による研究報告も行われ、多くの市民が熱心に耳を傾けていた。

こうした彫刻とアトリエの紹介を通じて、井上信道氏の軌跡を市民に知ってもらうため、平成25年1月31日から2月5日まで、山手234番館で「井上信道の彫刻とアトリエ」が開催された。



山手234番館での展示の様子 撮影：南信一郎

会場となった山手234番館には、氏が数多く制作した外国人の肖像彫刻や未完となった最後の作品などが

一般社団法人横浜歴史資産調査会 (YOKOHAMA HERITAGE) のとりくみ

鉄道開通140周年記念シンポジウム「横浜の鉄道と横浜駅」

平成24年は、鉄道が明治5[1872]年に新橋・横浜間に開通して140周年にあたる。ヨコハマヘリテイジでは、これを記念したシンポジウムを西区との共催で開催した(平成25年1月20日)。西区は、横浜駅が立地し、駅の変遷や鉄道の歴史がまちの形成に深く関わってきた区である。



シンポジウム会場の様子(はまぎんホールヴィアマール)

第1部の基調講演では、青木祐介氏(横浜都市発展記念館)から3代にわたる横浜駅の歩みが紹介された。第2部では、小野田滋氏(鉄道総合技術研究所)や堀勇良氏(建築史家)、梅澤厚也氏(西区区政推進課長)をパネリストに迎え、米山淳一ヨコハマヘリテイジ事務局長をコーディネーターに、パネルトーク「東海道の鉄道遺産探検」が行われ、ヨコハマヘリテイジのチームが東海道線沿いの鉄道遺産を実際に歩いて調査した成果が報告された。

また、午後には桜木町～横浜駅間の鉄道遺産を巡る見学会を実施した。当日は約200名の参加者があり、港とともに横浜の産業やまちを支えた鉄道の歴史を体感した。

コンサートinヘリテイジ 「ピアノが案内する横浜の歴史とまち Vol.2」

横浜の歴史的建造物やまちの魅力を伝えるコンサートをベリックホールで開催した(平成25年2月2日)。昨年の大倉山記念館に続く2回目で、ピアニストの後藤泉氏による山手にちなんだ選曲と演奏に、まちの成り立ちや建築の解説が加わり、居留地に様々な国の文化が流れ込



ピアノコンサートの様子

文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業

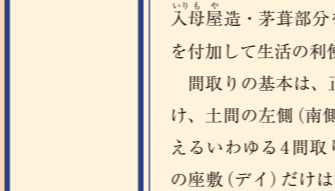
平成22・23年度に引き続き、文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業(文化庁)の採択を受け、ヨコハマヘリテイジでは年間を通じてセミナーの実施や近代建築資産に関する調査を行っている。

今年度も、市民向けセミナー、人材研修会、調査研究事業を実施した。市民向けセミナーでは、「復興が転機となった

横浜の近代建築」をテーマに、関内周辺の防火帯建築群や、紅葉に残る前川園夫設計のモダニズム建築など、これまで歴史的建造物としてあまり注目されてこなかった戦後の建築に焦点を当てたセミナーと見学会を実施した。



セミナーの様子



吉田町での防火帯建築の見学会

よこはまの原風景へ誘う 新川家住宅主屋

横浜国立大学大学院准教授 一般社団法人横浜歴史資産調査会 理事 大野 敏

新 川家は旭区今宿南町(旧都岡村日景)に所在する農家である。屋号をナカムラと称することから、300年以上の歴史を持つ有力な家であることがうかがわれる。

屋敷地は帷子川に矢指川が合流する場所の下流南岸、帷子川に沿う道の南に所在し、南西に丘陵を背負った緩斜面に構える。そして道から少し南に上がった平場に、主屋を東面して構える。日景の旧小字名は、この丘陵を背負った立地にちなむものであろう。なお、本来の新川家は帷子川の北岸、現在の国道16号線側に所在したらしいが、火災に遭遇したため現当主の祖父(明治18[1885]年生まれ)が4歳の時に現在地に移転して住宅を新築したと伝える。したがって現在の主屋は明治22[1889]年頃の建築ということになる。

主屋は間口7間半(約13.7m)・奥行4間半(約8.2m)・入母屋造・茅葺部分を主体に、背面と両側面に適宜空間を付加して生活の利便に供している。

間取りの基本は、正面向かって右側(北側)に土間を設け、土間の左側(南側)を上手として田の字型に4室を構えるいわゆる4間取り形式である。新川家の場合、上手の座敷(テイ)だけは樟縁天井を設けるが、残る3室と土間は根太天井とし、天井裏を中2階として養蚕に利用し



屋根を葺く美山の職人さんたち



見事に驚きあがった破風



新川家の皆さんを囲んで

ていた。神奈川県下の近世古民家は、土間境に広間と呼ばれる1室を構え、その上手に2室を加えたいわゆる広間型3間取りが一般的で、4間取り民家は一部の地域や階層に限られていた。しかし幕末から明治にかけて広間を前後に2分して4間取りに変化する事例、つまり広間型3間取りから4間取りへの変化が進み4間取りが一般化する。一方、入母屋造・茅葺き屋根は両側面がいわゆる兜状である点特徴である。神奈川県下における茅葺民家の屋根形式は寄棟造が多く、入母屋造は旧津久井郡を中心に分布し、相模川流域や境川と引地川両岸および県東部の旧都築・橋樹郡にも確認される。また、兜状の屋根は入母屋造の分布地域と一致する。屋根を兜状にする理由は中2階への通風換気目的に窓を設けるため、土間側に中2階を設けることが先行したため、まず土間側の屋根が兜状に変化し、後に居室側の側面屋根も兜状に変化するものが現れた。

旧津久井郡における中2階と兜状屋根の発達は、養蚕の盛行が要因である。そもそも入母屋造の屋根形式自体、屋根裏における通風換気に配慮したものであった。そして旧津久井郡やそこに隣接する山梨県東部・東京都奥多摩地域では、幕末頃から屋根裏を多層に区画して入母屋造の破風や兜状屋根に工夫を凝らした独特の養蚕民家を生み出した。

以上、新川家住宅の主屋はその屋根形状において旧津久井郡周辺に展開した養蚕民家の成熟した形式の影響を伝えており、間取りにおいて広間型3間取りが4間取りへ変化した形式を示している。したがってその建築年代が明治22年頃と伝えられていることは妥当である。横浜地域では茅葺き屋根自体大変珍しい存在になったが、入母屋造の茅葺き屋根はさらに稀少な存在である。その茅葺き屋根の修理が昨年行われた。古写真や聞き取りから判明する川崎・横浜・相模原地域にかけての入母屋造の茅葺き屋根は、(はま) (屋根両端の三角形の部分)の屋根形状が独特の曲線と曲面によって構成されている。近在に茅葺き職人がほとんどいなくなってしまった昨年、こうした地域色の強い茅葺きを継承することは困難であった。しかし工事を請け負った市川茂さんと茅葺きを施工した京都・美山の中野誠さんが、新川さんの記憶や各種資料を検討して、かつての破風形状の再現に挑んでくれた。今回の屋根修理は、茅葺き地域色継承という点においても重要な事業であった。なお、新川家の茅葺き主屋は、現在もすまいとして3世代のくらしが営まれている。しかも主屋裏手の屋敷地(雑木林の丘陵)は里山の風情をよく留めている。このように新川家は、横浜の原風景の一端を景観・建築・茅葺き技術・くらしのいずれにおいても継承している点ですばらしい。

新川家住宅の茅葺き屋根物語

(インタビュー・写真)
一般社団法人 横浜歴史資産調査会 常務理事 米山淳一

旭 区の郊外、今宿の里に息づく明治期の茅葺民家「新川家住宅」は、所有者の新川功さんが大切にされている横浜市認定歴史的建造物。平成23年度、約20年ぶりに茅葺き屋根の葺き替えが行われた。携わったのは川崎の市川茂さんと京都府美山の中野誠さんたち。関東と関西の職人さんが力を合わせて葺き上げた茅葺き屋根は一年を経過し、郷土の景観にすっきり溶け込んで存在感を増している。



新川 功さん



市川 茂さん



中野 誠さん

今回の葺き替えは、縁あって川崎民家園でご活躍の市川さんと巡り会いました。最初はどうなるのかなと思いましたが、市川さんが一生懸命にご研究され、美山の職人さん達も頑張ってくれてとても良い屋根になりました。近所の皆さんが珍しい屋根だと見に来られます。裏の雑木林と一緒に守っていければと思います。

市川茂さん(茅葺きを愛する文化財技術者)

都市デザイン室の担当の方に現場で作業を説明したら、新川さん共々解りやすいと言われました。三橋さんが84歳でお亡くなりになったので問題は屋根葺き師でした。全国茅葺き連絡協議会の小田原大会で、中野さんのお弟子の駒さんと意気投合したおかげで今回、実現したのです。茅は三橋さんと同じ御殿場の山茅を使いました。

三橋さんの屋根や自分の考えを参考に

昔の屋根に戻すことを考えましたが、大野先生のご指導で関口欣也先生の調査写真を基に類似の伊藤家旧宅(国重文・川崎市)にならって修理することになりました。特に破風の形が難しいので、立体的な模型を紙粘土で造り形を決めました。図面も50枚を越えました。

苦労しましたが、出来上がって良かった。葺きあがった写真を三橋さんの奥様にお見せしたら泣いて喜んでくれました。

中野誠さん(国重要伝統的建造物群保存地区・京都府美山の屋根葺き職方)

横浜で初めての仕事です。新川家住宅はびたっと一つになれる家といった感じです。自分の家の様な気持ちになりました。



模型を使って破風の説明



新川家居間で和やかに会話がはずむ

横浜市認定歴史的建造物に3件を認定!

山手の西洋館2件、関内の近代建築1件を認定し、認定件数は85件に



フェリス女学院6号館別館

フェリス女学院6号館別館は、関東大震災後に建てられた山手の西洋館のひとつで、外国人向けの賃貸住宅であったと考えられる。ベリックホールやエリスマン邸、山手234番館など、近隣に群で現存する西洋館とともに、震災後から戦前の山手の景観をいまに伝える大変貴重な建造物である。また、山手本通りに面して現存する数少ない西洋館としても大変重要である。

外壁は、震災後の洋館に多く見られるドイツ壁と呼ばれるモルタルを掃き付けて仕上げられた外壁であり、表面の凹凸が特徴的である。また、建設当初のものは不明であるが、外壁の一部に、完全に室内化された駐車スペース(インナーガレージ)の痕跡が残っており、山手の西洋館には珍しいものといえる。

開口部には、縦長で木製サッシの上げ下げ窓を基本としながら六角形の窓が用いられ、西洋館の特徴を示す貴重な部位となっている。また、西洋館ではあるが、和小屋組が用いられている。【建物是非公開】



河合邸

河合邸は、昭和4[1929]年に外国人向けの市営住宅として建てられた。外国人向けの市営住宅とは、関東大震災の被害を受けた外国人などを対象に、横浜市が大正14[1925]年から昭和4年までに建設した住宅のことである。山手町を中心に計29棟が建設されており、すべて、木造平屋建であるが、規模や形式は一律でなく、建設時期や実際の需要に応じて建設された。市営住宅として外国人向けの住宅が建設された事例は他都市にはない。

河合邸は、現存する外国人向け市営住宅3棟のうちの1棟である。玄関ポーチは半円アーチと装飾の施された円柱で構成され、外壁には装飾プレートを配置するなど洋館らしさを強調しており、特徴的な外観となっている。また、一部には、木製のよろい戸と上げ下げ窓も残されている。

この近辺には、同時期に計7棟が建設されたが、現存するのは河合邸のみであり、山手の歴史的景観を知る上で貴重な建造物である。敷地内には、創建当時のプラフ積も現存している。【建物是非公開】



旧神奈川県産業組合館

旧神奈川県産業組合館は、現在の農協(JA)の前身にあたる神奈川県産業組合の本部事務所として昭和13[1938]年に建てられ、最近まで神奈川県中央農業会館別館として使われてきた建物である。

横浜税関や神奈川県庁本庁舎をはじめ、関内でも歴史的建造物が多く残る重要な場所にあり、海岸通りから日本大通りにかけての歴史的景観を構成する貴重な歴史的建造物である。設計、施工とも清水組(現・清水建設株)で、基本的にシンプルでモダンなデザインだが、正面玄関や柱形を上下に通した垂直性の強調など、簡略化した古典主義的なデザインを特徴とし、同時代の建物の1つの典型といえるものである。

周辺の建物とともに、横浜の都市形成の歴史を物語る貴重な遺構であり、神奈川県農協の歴史としても時代を画すモニュメントといえる存在で、現在進められている建替計画のなかで、壁面を一部保存しながら外観を復元していく。【建物は平成26年まで工事中】



完成イメージパース提供:JA神奈川県連

モダニズム建築の保全・活用と慶應日吉寄宿舍

横浜国立大学大学院教授 一般社団法人 横浜歴史資産調査会 副会長 吉田綱市

横浜の戦前創建のモダニズム建築も、フェリス女学院10号館(昭和4[1929]年)とインベリアルビル(昭和5[1930]年)がすでに認定歴史的建造物となっている。ビルや日本穀物検定協会横浜支部のように、理念としてのモダニズム(荷重を支持する壁をなくし、薄い面で包まれたヴォリュームとしての建築。軽く無駄がなく付加的な装飾的細部を一切もたない)にかなり近いものもあるし、少量塊性と厚さや重さを感じさせるものもある。そうしたのももモダニズム建築とすることも健在である。モダニズム建築といっても様々で、現実の建物はインベリアル



フェリス女学院10号館

ビルや日本穀物検定協会横浜支部のように、理念としてのモダニズム(荷重を支持する壁をなくし、薄い面で包まれたヴォリュームとしての建築。軽く無駄がなく付加的な装飾的細部を一切もたない)にかなり近いものもあるし、少量塊性と厚さや重さを感じさせるものもある。そうしたのももモダニズム建築とすることも健在である。モダニズム建築といっても様々で、現実の建物はインベリアル

モダニズム建築は、建設時点での必要に最も合理的に応えるための一種の仮設的建築であるから、短期的にはきわめて機能的。構造もギリギリまで削って骸骨みたくに華奢な躯体の上に立っている緊張感に美を感じる

【横浜市】歴史を生かしたまちづくり 新たな展開に向けて始動!!

横浜市では、歴史的建造物を景観面から保全活用するため、「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づく登録・認定制度を昭和63[1988]年から施行している。赤レンガ倉庫や横浜税関など、横浜の大きな魅力の1つである歴史的建造物の保全活用を進めてきた一方で、旧横浜松坂屋本館など認定を解除せざるを得ない状況も起きている。歴史的建造物への市民の関心は高く、

こうした状況も踏まえ、所有者が保全活用をより進めやすくするための新たな制度等の検討を行い、今回、「歴史を生かしたまちづくりの推進について」(案)としてとりまとめた。

この案では、建築基準法への適合や所有者支援、市民協働などを取組を進めるうえでの課題とし、今後、次のような方針で施策を進めていくこととしている。



インベリアルビル

感性に基づいているから、無駄はないが、逆に余裕もないし、ゆったり、ぼんやり、のんびりの包容性もない。だから、当初とは異なった用途には対応しにくく、転用が難しいとされる。それに、眼や手を楽しませてくれる装飾的細部もないから、華やかで重々と思いき部分も保存して、その他は復元という方法も取りにくく、いっそ全部建て直したほうがよいという意見に傾きやすい。

そうした風潮のなか、快挙ともいえるべきモダニズム建築のすぐれた保全・活用の工事が昨年完成した。平成23年にすでに認定歴史的建造物となっていた慶應義塾大学日吉寄宿舍(昭和12[1937]年)の南寮である。もともとが、時代の最先端を



慶應義塾大学日吉寄宿舍(南寮)

いく大学寮であったが、今回の工事によってこれからも快適でモダンな寮として使われ続けることになる。もちろん、耐震補強がされ、創建当初すべて個室であった寮室を3人部屋に間仕切りを変えなどの改装は施されているが、外観・内部ともよく創建当初の姿をとどめるよう保存修復されている。日吉寄宿舍は北寮・中寮・南寮という同形同大の3棟と、「ローマ風呂」とも呼ばれた浴場棟からなるが、最近までは中寮のみが使われていた。こんどは南寮だけが使われるわけだが、浴場棟や他の2棟の活用が待ち遠しい。

- 所有者による保全活用の支援などの制度拡充の推進
- 市民とともに守り活かす取組の推進
- 歴史的建造物を魅力資源として活用したまちづくり、賑わいづくりの推進

制度拡充では、一定条件のもとで建築基準法の適用除外を可能とする「(仮称)特定景観形成歴史的建造物制度」の創設が柱となっている。この制度は、景観条例を改正して創設するが、外観保存と内

部の一部保存等によって、保全と活用を一体的に行う建造物を対象とし、所有者による保全活用の支援や、賑わいづくりなどによる都市の活性化へ寄与していくことを目指している。また、人材育成、活動支援などや、歴史的建造物を活かした都市の魅力向上などもあわせて進めることとしている。

今後、この案をもとに平成25年度以降、市民意見募集を行い、条例化など制度や施策の具体化を進める予定である。

関東大震災復興住宅 横浜市営外国人住宅

関東学院大学教授 一般社団法人 横浜歴史資産調査会 理事 水沼淑子

横浜は関東大震災で大きな被害を受けた。日本人同様、横浜で生活していた多くの外国人たちも職場や住まいを失い、母国や神戸などに避難した。横浜市は、外国人の存在は横浜の復興に欠くべからざるものと考え、彼らの生活の拠点となる住宅を建設することを企画し、内務省社会局長官と同潤会会長宛に外国人向け市営住宅建設の資金交付を申請した。その結果内務省から10万円が交付され、日本で他に例のない外国人向け市営住宅の供給が開始された。

大正14[1925]年12月に根岸町鷺山に4戸、同じく加層ノ上に1戸、大正15[1926]年に山手に9戸、根岸町寺久保山に1戸、昭和2[1927]年に山手に2戸が建設され、入居希望者が多かったことから、さらに同

愛記念財団から10万円を借入し、昭和3[1928]年山手に5戸、昭和4[1929]年に同じく山手に7戸が建設され、昭和4年までに合計29戸の市営外国人住宅が誕生した。山手には条約改正後も広範囲にわたり永代借地権が設定されていたが、関東大震災後は永代借地権売却を希望する所有者が多く現れたことから、横浜市は政府からの借入金により永代借地権の買取を開始した。市営外国人住宅の敷地は大正14年から昭和2年にかけて永代借地権が抹消され、横浜市の市有地となった土地だった。

市営外国人住宅はすべて木造平屋建てで、屋根はスレート葺きと瓦葺きの2種。一戸あたりの規模は30坪から45坪までであり、35坪前後のものが多い。横浜市が同時期に建設した一般向けの市営住宅のうち最大規模の住宅でも21坪で、15坪程度の住宅が最も多かったことから考えれば、外国人向け市営住宅は規格外の大きさだったといえる。また、29戸の住宅は、規模や間取り、外観ともに多様であり、建設費にもかなりの



加層ノ上に建設された外国人市営住宅

市会での説明では、当初は同じ形式の住宅を一定数建設する予定だったが、外国人の事情に合わせさまざまな住宅が建設されたという。外国人にとっては、決して満足できる住宅ではなかったに違いないが、現在確認できる市営外国人住宅は、間取り、外観、インテリアいずれをとってもめったに洋館に仕上がっている。

当時の新聞によれば応募倍率は2.5倍で、そこそこの人気を得ていたことがわかる。確かに最初期に建設された市営外国人住宅は「西洋館」という華やかなイメージの住宅とはいささか異なり、簡素でつましやかな住宅だった。平成18年に認定された山手89-8番館はこの時期の市営外国人住宅である。一方、今回認定された河合邸は最後の市営外国人住宅であることから、規模も大きく、外観にも装飾的な要素を付け加え洋館らしさを演出しており、外国人に好まれる住宅を追求した成果が見てとれる。

市営外国人住宅は、建設後しばらくは外国人たちの住宅としてその役割を全うした。しかし、第2次世界大戦開戦後外国人たちは山手を去り、日本人に払い下げられ戦後を迎えた。90年近くを経た今日、確認できる市営外国人住宅はわずか3棟である。



山手89-8番館

外国人を対象にした市営住宅の建設は、国際都市横浜ならではの震災復興事業だった。市営外国人住宅事業の最初期に建設された山手89-8番館と最後に建設された河合邸の2棟が併せて認定されたことで、横浜の震災復興の軌跡の一端をたどることができるようになった。設計は横浜市建築課が担当しており、この2棟の市営外国人住宅の違いは、「外国人の住まい」を真剣に追求し、心から外国人に戻ってきてほしいと願った当時の横浜市の切なる気持ちを表しているといえるだろう。また、今日山手に残る西洋館には、震災後外国人向けの借家として建設されたとの由緒をもつ住宅も多く、市営外国人住宅は市市らがあげた山手復興ののろしだったのだ。併せて付け加えれば、河合邸の認定はヨコハマヘリテージによる山手地区西洋館の再調査に端を発したものである。山手の今後を考える契機となることを期待したい。